

刊行の経緯

1980年9月に刊行された国語学会（当時）編『国語学大辞典』は好評を以て世に容れられ、1999年7月には第10版（刷）に至った。そして、この『国語学大辞典』が国語学会創立30周年記念事業であったために、2000年頃からは、最新の日本語学や隣接諸分野の研究成果を盛り込んだ形での改訂が理事会で話題になっていた。当初は国語学会創立60周年記念事業として位置づける考え方もあったが、単なる改訂ではなく、新規の辞典を編集すべきであるとの考えも示されるようになった。

2004年に国語学会が日本語学会と名称を変更してからは、次第にこの機運が盛り上がり、特に2006年からは理事会でしばしばこの新たな辞典の編集が話題に上るようになった。そして、新規編纂である以上は編集に時間を要するとして、国語学・日本語学会創立70周年（2014年）記念事業として位置づけられるようになって行った。

このような中、2007年4月の理事会では野村雅昭会長（当時）が、『(仮称)日本語学大辞典』の編集について、2007年度に準備を行い、2008年度から作業を開始することを提案し、正式に承認された。この『日本語学大辞典』（以下『大辞典』と略す）の編集はこのようにして開始されたものである。

委員会の構成については、野村会長を中心として人選が行われ、14名に編集委員を委嘱することが本人の内諾を得て2008年1月の理事会で承認された。野村会長は編集委員長兼『大辞典』編集担当理事を務めることになった。こうして発足した委員会は2008年4月に第1回の編集委員会を東京大学で開催し、活動を開始した。他方で株式会社東京堂出版との具体的協議も2008年2月に行われ、日本語学会との間に、『国語学辞典』『国語学大辞典』と同様この『大辞典』も東京堂出版を版元として刊行することなどについて合意を見た。

編集委員会の当面の課題は、『大辞典』に立項すべき項目とそれらの執筆者の選定であった。前者については、『国語学大辞典』の中項目主義を踏襲しながらも、学問の進展に応じたあり方を学界の現状も踏まえて再検討することとした、また、後者については基本的に執筆者の若返りを実現することも合意された。これらの検討は2008年春から夏にかけて精力的に行われ、秋には一応の成案を見た。このために同年8月には合宿形式の集中作業を行った。その結果、本辞典には852項目を収載することが決定された（ただし、後に検討の結果、統合が行われ、最終的には797項目となっている）。

編集委員の居住地は全国に亘り、頻繁な編集委員会の開催は必ずしも容易ではなかった。2008年度には5回の編集委員会を開催したが、その間にも、実務的な事項を機動的に処理するために、東京近辺の委員により、「総務グループ」を構成し、打ち合わせ会を数度に亘り行った。野村、月本、安部、杉本、木村、田中、山本がそのメンバーであった。

刊行趣意書、執筆依頼状、執筆要項などの日本語学会並びに東京堂出版が準備すべき各種文書が完成し、執筆依頼を行ったのは2009年12月初めであった。この際に依頼した項目は827項目、依頼先は409名であった。残りの項目などについて、追加の依頼を2010年4月、5月、7月、11月の4回に亘って行い、これによって大部分の項目の執筆依頼が完了した。最初の原稿は2009年12月のうちに東京堂出版編集部に届き、我々はこれを幸先のよいことと喜んだが、後にこれが早計であったことを思い知らされることとなった。

言うまでもないことであるが、この種の辞典の編集の進捗は何よりもまず、原稿の到着状

況に依存する。2010年の半ばまではまとまった数の原稿が到着したが、やがてその勢いは衰え、2010年秋の段階で、集まった原稿は半数に満たず、2012年の春に至っても、約70%であった。

到着した原稿は総務グループで分担して一読し、問題があれば、執筆者に確認するなどの措置を行った。その過程で、当然予想されたことではあったが、執筆者間に表記上の不統一が相当あることが判明した。また、本辞典の特徴でもあるが、参考文献の類（[文献]欄）は単行本、論文を問わず、発行年順に配列することとしていたが、実際の原稿では単行本と論文に分けて記したり、著者の五十音順に並べたものなども少なからずあり、この点は抜本的な調整が必要であると思われた。

こうするうちに編集委員会として当初理事会によって認められた任期の終わり（2012年春）が近づいた。なお未到着の原稿はかなりあり、到着した原稿にも調整が必要であって、編集委員会、特に総務グループにあっては、未着原稿の督促と到着済みの原稿の調整という二方面の作業を推進する必要に迫られた。

そこで、野村編集委員長は編集委員会の改編を2012年4月の理事会に提案し、承認された。それは編集委員会の機動性を高め、作業を効率化するために、総務グループを中心にした委員会とし、野村委員長が退任し、2009～2012年の間会長であった鈴木泰氏と共に参与に就任することであった。また、これに伴って月本が新たな委員長となり、田中牧郎氏が新たな編集委員主任となった（末尾の名簿参照）。

2012年以降の編集委員会（第2次）の最大の課題は、到着済み原稿を入稿するための準備であった。どのようにして印刷所に原稿を入稿するかは編集委員会にとって大きな問題であったが、これについては、田中編集委員主任を中心に検討が行われ、全ての原稿をWordのファイルに変換し（手書き原稿は印刷所でデータ化）、必要な表記の統一、「文献」欄の修正を施し、さらに東京堂出版による原稿指定を加えた上で入稿することとなった。

編集委員会では2008年の段階から、編集委員の指示に基づき、実務的な作業を行う「補助員」を数名の大学院博士課程レベルの人たちに委嘱していたが、入稿データの整備、表記の統一、「文献」欄の点検について、補助員の大きな援助を得た。そして、編集委員は引き続き到着済み原稿の点検を実施し、2013年には1回、2014年には2回、補助員を含めた集中作業を行った。2014年には補助員により、表記の統一のための膨大なマニュアルが作成され、以後増補を続けながら編集委員も含め、それに従うこととなった。併せて「付録」の検討も開始され、『国語学大辞典』に付録として収載されていた各種の文献目録は、インターネットの各種サイトに譲って、『大辞典』には収めないこととなった。また、未着原稿の督促も精力的に続けられた。

2015年にも引き続き、編集作業が継続された。大きな進捗としては、4月に本文原稿の137項目を入稿したことがあった。その時点において、到着済み原稿は90%を超え、編集委員会としては編集委員、補助員が協力してさらなる入稿原稿の整備を実施した。このために、2回の集中作業を行った。編集委員会（第2次）の委員の任期は2014年春に一旦終わり、同年4月の理事会で2015年5月まで延長されていたが、同年4月の理事会でさらに2018年5月までの延長が承認された。その後、2018年4月の理事会で現在までの任期延長が認められている。

2016年2月には、新たに岡部嘉幸氏、佐藤琢三氏を編集委員に加えることが理事会で承認された。これは『大辞典』の刊行に向けて、編集委員会をさらに強化するためであった。

これに先立ち、2016年1月には本文原稿の134項目について入稿を行った。この2回の入稿によって出校した項目については、2016年4月に執筆者に送付し、著者校正を求めた。この後、数次に亘り入稿と初校の執筆者宛送付を行った。この年も2回の集中作業を実施した。

2017年春からは本格的に付録の検討に入った。詳細は田中編集委員主任の手になる「編集を終えて」の記載に譲ることとする。秋には大部分の本文再校が出校し、編集委員並びに補助員が詳細に点検を行った。この年もまた、2度の集中作業を実施した。この年の秋、東京堂出版側から日本語学会に対し、『大辞典』の刊行に関し、覚書または出版契約を締結する提案がなされた。これには仁田義雄前会長が対応し、2018年3月に両者の間で出版契約がなされた。

2018年には春に本文の三校が出校し、補助員が夏にかけて点検を行った。また、本文の全ての原稿が出揃った。そこで編集委員は付録の作成と点検に集中することとなった。このために、最後の集中作業を5月27日と6月3日に実施した。そして8月14日に編集委員会と東京堂出版の最終的な協議が行われ、10月刊行が決定した。

この『大辞典』の刊行に当たり、多くの方々へ感謝の意を表したい。まず何よりも、本文の執筆を快諾され、原稿をお寄せ頂いた執筆者各位に御礼を申し上げる。ただ、執筆依頼から刊行まで、約9年が経過し、長くお待たせすることとなったのはまことに申し訳なく、お詫び申し上げたい。また、原稿をお寄せ頂いてから今日までの間に約30名の方が逝去され、生前にこの『大辞典』をごらん頂くことができなかった。このことは編集の責任者として、心からお詫び申し上げる次第である。

また、日本語学会の関係者、特に歴代会長並びに財務担当理事、庶務委員長各位には、この『大辞典』の編集に関し、多大なるご理解を頂き、多額の学会の予算を支出して頂いたことに対して厚く御礼を申し上げたい。

東京堂出版の関係者にも謝意を表したい。この『大辞典』の企画の初めから深く関与して下さっていた第一編集部長（当時）の渡部俊一氏が2012年6月に50歳代半ばで逝去されたことは我々編集委員会にとって大きな痛手であった。そのためもあって、社内的にはともかく、この『大辞典』の担当者はほぼ実質的に菅原洋一氏お一人になってしまったと私は考えている。私は日本語学会側の責任者として、私よりも数年年長の同氏に対し、非常にしばしば厳しい注文を突きつけた。今となってはまことに申し訳ないと思うが、日本語学会の編集になる刊行物として、類書に負けない卓越した『大辞典』にしたいと思う余りのことであつたとご理解頂き、ご寛恕頂きたいと願う。

また、編集委員各位にも、心からの御礼を申し上げたい。この『大辞典』のための編集委員会の会議は第1次委員会では11回、第2次委員会にあつては実に56回開催された。しかしながら、2015年以後は日本語学会が財政的な困難に直面したため、編集委員と会議に関する費用は学会から全く支出されなくなった。そのみならず、種々の御負担を頂き、言わば「手弁当」を遙かに超える御負担を強いてしまった。それにもかかわらず、編集委員各位は全く不満を漏らされず、ご多忙の校務の中、真に献身的に編集作業や付録の作成にご尽力下さった。このような各位に対する感謝の念を私は終生忘れないであろう。

さらに補助員の各位にも深甚の謝意を表したい。石川創、藤本灯、平井吾門、林淳子、遠藤佳那子、田中草大、南雲千香子の各氏は、編集委員の指示に基づきながら種々の作業に従事し、しかし、編集委員の期待を遙かに超えて、数多くの問題点を指摘して下さった。自身の研究の時間を切り詰めて、若い力を存分に発揮して全面的な御協力を頂いた各氏に心から

御礼を申し上げたい。

このような感謝の念と共に、今、私は深い反省の念も抱かざるを得ない。例えば、本文原稿を集めることについて、当初の見通しが甘かったことは否定できない。現在の大学教員や研究者の現実に思いを馳せるべきであった。また、版元との業務の分担について、事前に詳細に協議を重ねるべきであったとも思う。本文原稿の督促について、電話、メール、郵便などでは連絡が取れない場合、編集委員が分担して面談で督促することを余儀なくされたが、これは同業者として、なかなか厳しい事態であった。予め双方が何をどこまで行うか、決めておくべきであったと、これは編集委員会側の反省点として述べておくこととする。

最後に個人的な感懐を申し述べることをお許し願いたい。2008年に編集委員主任を拝命した際、また、2012年に編集委員長をお引き受けした時、『国語学大辞典』の「あとがき」(築島裕編集主任執筆)を読み返し、1980年刊行の同辞典が、尋常ならぬ苦心の産物であることを改めて感じたことであった。当時大学院生であった私自身、多少の編集作業のお手伝いはしたが、これほどまでにこの種の辞典の編纂に苦心の伴うものであるとは、『国語学大辞典』の当時、思いも寄らないことであった。取り分け2012年の段階で心に去来したのは、この『大辞典』の刊行の暁に、自分がどのような「あとがき」の類を書くことになるのか、ということであった。築島氏と同様の思いを綴ることになるのか、それともそれとは異なるのだろうか、様々に想いを廻らしたことであった。しかし、『日本語学大辞典』の刊行を前に、やはり私も自分の恩師でもあった築島氏と同様の思いを反復していることを強く感じている。

ただし、『国語学大辞典』とは異なる状況も生まれている。日本は縮小しつつあり、それに比例して、と言うよりもそれにも増す勢いで、日本の人文系諸学会は縮小しつつある。このような事態の下、この『日本語学大辞典』が今後も継承されて、いつの日か改訂されることを心から祈りたい。

執筆者各位、学会・学界関係者各位、編集関係者各位に改めて感謝を捧げつつ、筆を擱く次第である。

2018年8月

『日本語学大辞典』編集委員会(第2次)委員長 月本雅幸

日本語学会「日本語学大辞典」編集委員会名簿

●編集委員会(第1次, 2008年2月~2012年5月)

編集委員長	野村雅昭
編集委員主任	月本雅幸
編集委員	安部清哉
	伊藤雅光
	沖裕子
	生越直樹
	木村義之
	金水敏
	釘貫亨

杉 本 武
高 山 倫 明
田 中 牧 郎
野 田 尚 史
松 森 晶 子
山 本 真 吾

●編集委員会（第2次，2012年6月～現在）

編集委員長 月 本 雅 幸
編集委員主任 田 中 牧 郎
編集委員 安 部 清 哉

木 村 義 之
杉 本 武
山 本 真 吾

(2016年2月～現在)
(同上) 岡 部 嘉 幸

参与 佐 藤 琢 三
鈴 木 泰
野 村 雅 昭